波佐文化協会の歩み（PDF版）

④

5.　地域自立への飛躍

- 25周年記念事業『世界の写真展』開催
- 能海寛研究会結成の呼びかけ
- 『金城の風土記』発行
- サントリー『地域文化賞』受賞
- まんが『西蔵探検家　能海寛』の出版

地域自立への飛躍

①「能海寛研究会」全国組織の立ち上げ

②　　能海寛チベット壮途100年記念
世界の冒険家「写真展」の開催

③ フォーラム「日本人の旅と冒険」開催

④ よごろの晩に「地芝居を観る会」を開催

⑤　　能海寛中国訪問100周年記念
「胡弓と楊琴ジョイントコンサート」開催

⑥「まんが西蔵探検家　能海寛」の発刊

⑦「親子学習塾」3回コースで開催

⑧「能海寛歌碑（10基）」建立事業の推進

⑨「歌碑めぐり」ウォークラリーコースの策定

⑩「観光ガイド講習会」を開催（全4回コース）

(3) 波佐文化協会創立二十五周年記念事業

能海寛チベット壮途一〇〇年記念

◇ 写真展「地平線発」―二十一世紀の旅人たちへ―

会期　平成一〇年三月七日～一五日

会場　金城町波佐・ときわ会館

主催　波佐文化協会

共催　能海寛研究会

企画・制作　NOVL-KA（ノヴリカ）

後援　地平線会議

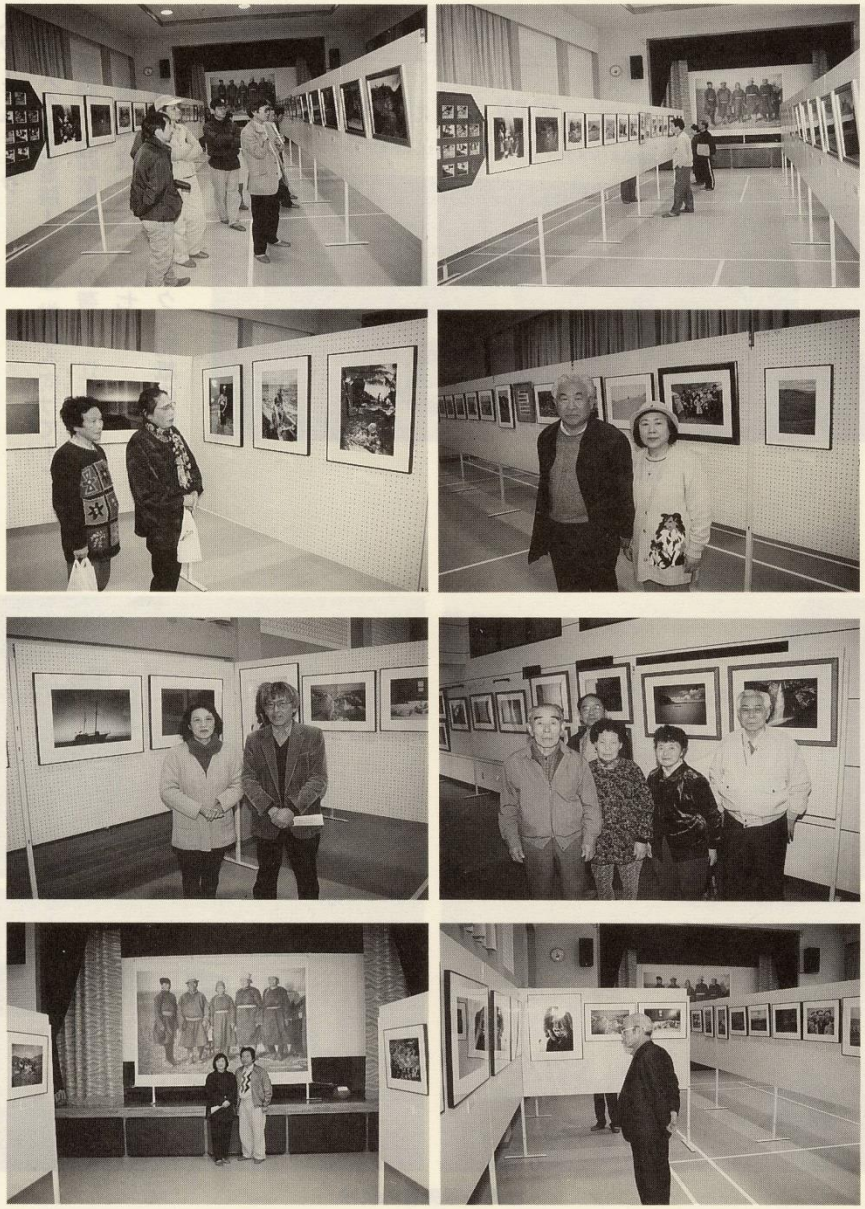
国境を越え、地球という大舞台に行動する日本の冒険家・探検家・登山家・ジャーナリスト等三十九人（地平線会議所属）のご協力とノヴリカ様のご支援を得て世界の写真展（六十九カ国）・旅する写真展を探検家・能海寛の故郷金城町で開催することができました。

一九七二年～九五年にかけて海外で活躍された方々の写真総数二二九点、人々の暮らし・圧倒的自然との遭遇……二十一世紀に伝えたい地球を再認識することができました。

この写真展には遠くは熊本県五木村をはじめ約七〇〇名の観覧を戴きました。（詳しくは後段のⅣ(2)新聞掲載記事をご参照ください。）

世界の写真展の模様

世界の写真展スナップ



◇ スライド＆トーク

『日本人の旅と冒険―二十一世紀へ向けて―』

講師　『西蔵漂泊』の著者　江本嘉伸さん

日時　平成一〇年三月七日

会場　金城町波佐・エクス和紙の館

記念講演（江本嘉伸氏）

世界の写真展の模様

まとめ

波佐文化協会発足二十五周年を記念して発刊した『金城の風土記』は、地域の教育力を育てつつ、心豊かに人生を楽しく、愉快に、快適に、過ごそうと四半世紀の間模索してきた生涯学習の記録であります。二十世紀がいかなる世紀に向かっても学習を続けながら立ち止まり、また歩き始める人生を繰り返すことでしょう。

この本は二部構成としております。第一部は、「歴史に学ぶ」として、「金城町」をテーマに「古代から現代」までのジャンルで、これまでに波佐文化協会の主宰してきた一連の事業に関係され、ご支援を戴いた講師陣の先生方から金城町に関する思い入れ、提言などをご寄稿いただきました。第二部は、「ふるさとカルチャー二十五年」として、社会教育の推進による町おこしの実践記録集と資料編で構成しております。スペースの関係で十分なる資料掲載はできませんでしたが、駆け足で二十五年間を振り返って見ました。

「金城の風土記」に掲載されている内容は、多くの講師陣の先生方に支えられ御蔭さまで首尾よく運営することができました。この誌上を借りて関係者の皆様方に心より厚く御礼申し上げます。また町当局の心温まるご支援に対し、また一緒に学んだ皆様方にも、この場を借りて御礼申し上げます。

写真展の展示準備を終えて（H10. 3. 6）

波佐文化協会事業一覧

(1) 波佐文化協会事業一覧

波佐文化協会のあゆみ

S四七・八・一　波佐文化協会結成。

S四七・八・一五　結成記念講演『美しい村づくり』
　講師　美又小学校長　河野明先生

S四七・一〇・一　波佐成人学級を主宰(S五七・三・三までの一〇年間・総事業費 八、〇〇〇、〇〇〇円)
　年間を通じて夜間学習を中心として実施。

S四八・二・三　第一回文化祭を開催。以後毎年開催し(S五八・二・三)第十一回文化祭まで主催する。
　第十二回文化祭からは公民館事業として継承する。

S四九・二・三　文化祭特別展『能海寛遺品展』主催。

S五〇・四・一　波佐公民館の管理運営を受託(H六・三・三まで)。

S五〇・二・三　文化祭特別展『池田一憲絵画個展』主催。
　出展者　画家　池田一憲氏

S五一・三・二　成人学級修了式記念講演『これからの農業』
　講師　久宗農業創始者　久宗壮先生

S五一・六・六　郷土芸能『大花田植』主催(伝承民俗を完全再現)。

S五一・一・一六　『郷土の傑人顕彰板(能海寛・島村抱月略譜)』の建立(事業費 九〇〇、〇〇〇円)
　除幕式・記念法要を実施。記念講演『日本文化史における抱月のはたした役割』
　講師　抱月研究者　岩町功先生

S五二・三・二六　成人学級修了式記念講演『尼子經久とその生涯』
　講師　郷土史家　妹尾豊三郎先生

S五三・二・一　書籍出版『幼年期の抱月と小国富士』P40(事業費 五〇〇、〇〇〇円)

S五三・五・三〇　楽焼窯『亀遊山窯』竣工。

S五三・二・三　文化祭特別展『アマゾンの博物展』津田小学校教諭・奥原省一郎先生出展。

S五六・二・三　文化祭特別展『ラマの都・チベット写真展』(四ツ切版 七〇点)
　記念講演会『世界の屋根ラマの都』
　講師　NHK大阪報道局P.D　上野克二氏

S五七・五・一　十周年記念講演会『とおりゃんせ』＝この道はいつか通る道＝
　講師　京都堀川病院副医院長　早川一光先生

S五七・二・三　文化祭特別展「三井の晩鐘の原画展」
　出展者　画家・池田一憲氏

S五八・七・一五　ミニコミ誌・季刊「なわて」を発行。(全戸配布)H五・五・一(NO一〇)まで発行。

S五九・七・一四　明日香村探訪旅行企画(二泊三日)。

S五九・二・三　新波佐八景制定。(地区民の投票で決定)

S六一・七・一九　リーダー養成講座「波佐寺小屋セミナー」主宰。
　(S六三・三・三まで十二回開催・総事業費 三、五〇〇、〇〇〇円)

S六一・六・一八　国際平和年記念映画『はだしのゲン』上映。

S六二・六・一三　十五周年記念行事・映画の夕べ『こんにちはハーネス』ほか。

S六二・六・一八　東宝映画『敦煌』を全国封切りに先駆け上映。

S六三・二・二〇　書籍出版 チベット探検の先駆者『能海寛』P三一〇(事業費 一、五〇〇、〇〇〇円)

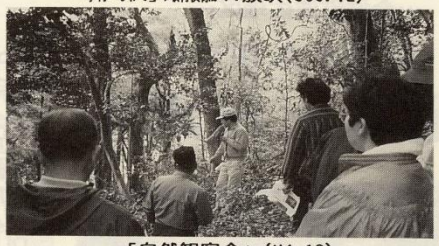
H一・一・一八　出版記念講演会『チベット探検の先駆者能海寛』

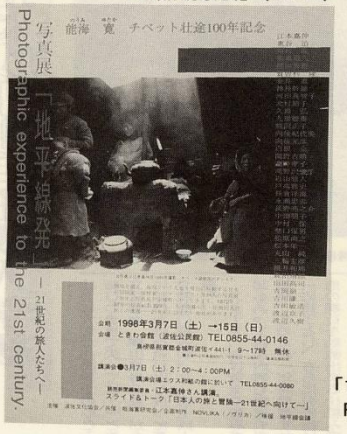
H一・二・二一　ふるさとカルチャー「なわて塾」主宰。
（H三・三・三まで十二回開催・総事業費　一、五〇〇、〇〇〇円）
H一・七・三　七・二二泉源探査（地下温度調査法で二五〇地点を調査。事業費　四〇〇、〇〇〇円）
H三・三・二一　『観光&長寿福祉』企画書作成。
H三・三・一　第二次「なわて塾」主宰。（H五・三・三まで二八回開催・総事業費　一、〇〇〇、〇〇〇円）
H四・一・二一　金城町へ要望書提出
①抱月文学散歩道スタンプラリーの創設
②能海寛・哲学の道サンクリングコースの創設
H四・四・二五　書籍出版『島村抱月＝幼年期と生い立ち＝』P七三（事業費　八〇〇、〇〇〇円）
H四・六・　名水『常磐の水』を用いた佐竹庭園でお茶会を開催。
H四・一〇・八　みんなで守る郷土の自然地域『常磐のカシ林』遊歩道整備（事業費　四〇〇、〇〇〇円）
H四・一一・一　『金城町観光総合パンフ』の作成発行（事業費　一、五〇〇、〇〇〇円）
H四・一二・六　「常磐のカシ林」遊歩道完成記念『自然観察会』主催。
講師　島根県自然観察指導員・森定善政氏
H四・一一・三〇　名水『常磐の水』環境整備事業（事業費　二〇〇、〇〇〇円）
H五・七・二四　先進観光資源活用状況調査旅行（松江市・安来市・頓原町・赤来町）
H六・八・一　能海寛研究会全国組織準備委員会設置。
H六・一二・二〇　能海寛研究会設立趣意書配布・募集開始。
H七・一・二三　「能海寛研究会」設立総会。
H七・七・一五　機関紙「石峰」創刊号発行。（以後年間二回発行）
H七・七・一九　第一回「能海寛研究会記念大会」開催。
講師　『西蔵漂泊』の著者　江本嘉伸氏

H七・九・八　研修旅行（滋賀県湖東町西堀栄三郎探検の殿堂・京都市大谷大学図書館）
H八・七・二四　第二回「能海寛研究会年次大会」開催。
講師　「西蔵求法伝『風の馬』」の著者　村上　護氏
H八・一〇・九　96・文化活動支援事業「よごろの晩に地芝居を観る会」開催。
出演　「今福劇団」一座の皆さん
H九・七・三〇　第三回「能海寛研究会年次大会」開催。
講師　『ヒマラヤの東』の著者　中村　保氏
H一〇・三・七　能海寛チベット壮途100年記念・世界の写真展『地平線発』～二世紀の旅人たち～を九日間開催。
同記念講演会『日本人の旅と冒険～二十一世紀へ向けて～』
講師　『西蔵漂泊』の著者　江本嘉伸氏

チベット写真展（S56.11）

季刊「なわて」の取材模様がTV放映（S60.12）


「自然観察会」（H4.12）



「世界の写真展」
PRポスター（H10.3）

波佐文化協会が全国呼びかけ平成7年1月22日「能海寛研究会」を設立する。

1999．7　ときわ会館にて

能海寛研究会年次大会の模様

旅と冒険フォーラムの模様

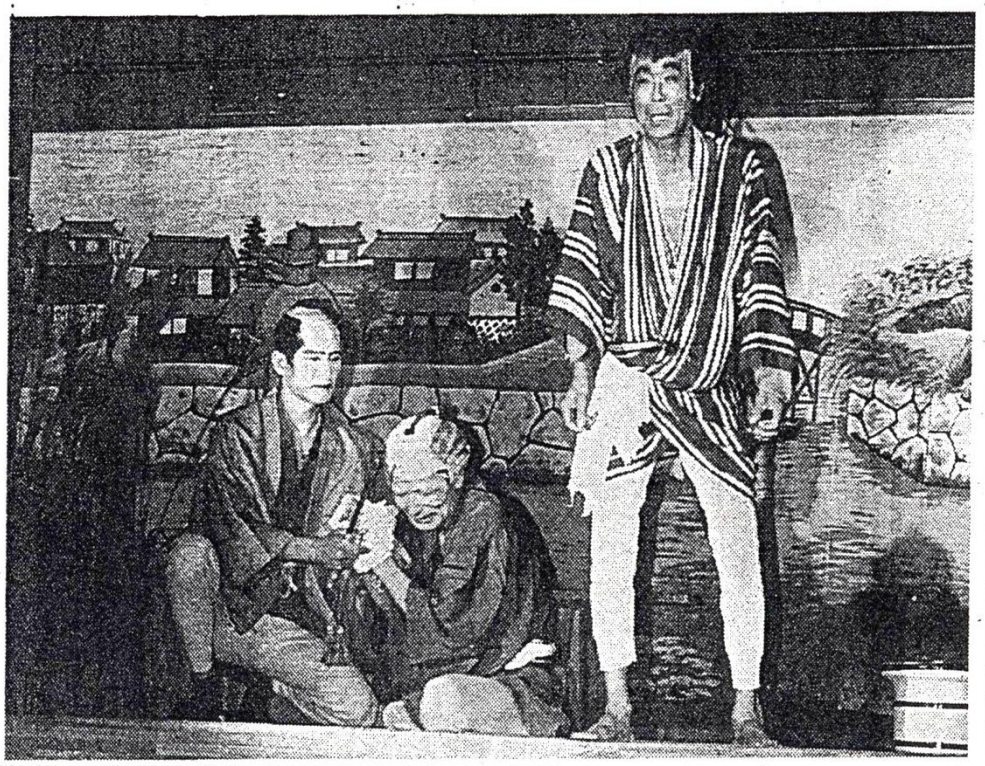
山陰　中央新報　平8.10.11　（第3種郵便物認可）

秋祭り前夜に地芝居を

町内の劇団招き50年ぶり公演

金城・波佐文化協会が「観る会」

「よごろの晩に地芝居を観る会」で熱演する、いまふく劇団の劇団員



「よごろの晩」（祭りの前夜）に、地芝居を堪能―。金城町波佐地区の地区民有志らでつくる波佐文化協会（隅田正三会長、百七十人）は九日夜、同町波佐のときわ会館で「よごろの晩に地芝居を観（み）る会」を開いた。約百三十人の地区民が詰め掛け、同町今福地区の地芝居劇団・いまふく劇団の熱演に盛んな拍手を送った。

2演目上演　地区民、盛んな拍手

波佐地区では、同地区の常磐山八幡宮の秋祭り（十月十日）の前夜祭として古くから地芝居と夜神楽が行われていた。夜神楽は現在も奉納されているが、地芝居は約五十年前に廃れており、地区の古老から「もう一度地芝居を見たい」との声が上がっていた。

そこで、今年で設立三十五周年を迎えた同協会が記念行事として、地芝居を観る会を企画。文化活動支援事業と銘打ち、町内の文化団体の相互交流を深める目的でいまふく劇団（田邨一男団長、十四人）を招き、よごろの晩の地芝居公演を復活させた。

同劇団は、時代劇「巡礼おつるの物語」と「情の十手」の二演目を軸に舞踊や歌謡曲を織り交ぜ、多彩なステージを披露。「情の十手」は、島帰りの安太郎が父親と再会し、父の情に触れて更生を誓う筋書。観客は十手持ちの役人に連行される安太郎が叫ぶ「おとっつぁーん」のせりふに盛んな拍手を送った。

山陰中央新報　1998年（平成10年）3月8日（日曜日）

ローカル

身近なニュースや催し事件・事故など速報をもよりの支社・支局へ

県内の取材網
本社報道部　松江市殿町　☎0852(32)3320　FAX(22)4075
出雲支社　出雲市渡橋町　☎0853(21)0019　FAX(21)0922
木次支局　木次町里方　☎0854(42)0062　FAX(42)1491
安来支局　安来市安来町　☎0854(22)2069　FAX(22)5417
平田支局　平田市平田町　☎0853(62)2675　FAX(62)2689
西郷支局　西郷町港町　☎08512(2)0356　FAX(2)0912

世界の人々の思い活写

能海寛しのび写真展「地平線発」

探検家らの229点並ぶ

金城

日本人として初めてチベットの地を踏んだ金城町出身の学僧能海寛（のうみ・ゆたか、一八六八年―没年不詳）をしのぶ写真展「地平線発・21世紀の旅人たちへ」が七日、同町波佐のときわ会館で始まった。日本の冒険家らがチベットなど世界中で撮影した写真二百二十九点が並び、町民らが能海の生きざまに思いをはせている。十五日まで。

明治時代、三回にわたってチベット探検を行った能海が、チベットを目指してから百年になるのを記念し、金城町の文化団体・波佐文化協会（隅田正三会長）が開催。国境を越えて行動する日本の冒険家や探検家、ジャーナリストら三十九人で組織し、全国で巡回写真展を開いている「地平線会議」（江本嘉伸代表世話人）の協力を得て、一九七二年から九七年にかけて世界六十九カ国で撮影された作品を展示した。入場料は一般五百円、中学生以下は無料。

中国チベット自治区の僧院で読経を終え、主食のツァンパ（麦こがし）にバター茶を混ぜて食べる僧りょの写真（八二年、江本さん撮影）や北京・天安門広場でハンスト抗議中の民主化運動のレーダー、ウアルカイシらを撮った作品（八九年、森田靖郎さん撮影）をはじめ、迫力ある写真でアジアの多面的な横顔を紹介。ケニアのスラム街住民やモルディブの割礼儀式など、多様な歴史や文化、自然の中で暮らす世界の人々の息遣いが伝わる作品が並んでいる。

江本代表世話人は「写真を撮ったメンバーは、能海の国際理解の心を知らず知らずのうちに引き継いでいる。能海の出身地・金城と接点をもつことができてうれしい。貴重な機会なので、多くの方に足を運んでもらいたい」と話している。

冒険家らが撮った写真に見入る入場客

(4) 今後の課題

社会教育を推進する公民館の今後の方向性としては、今日のカルチャー教室的な教室に終始するのではなくて、時代を先取りした、先見性のある時代のニーズに合った学習スタイルがより求められのである。

昨今、教養講座の少ないのは非常に残念である。単独の公開講座も時には必要である。地域の方向性をどうするのか。その為には今、何をやらねばならないのか、も考えながら運営していかなければならないのである。社会教育はロングランな人づくりであり、二～三十年もかかる長期ビジョンの仕事でもある。さしむき投資した結果が明日には出るというものでは決してないのである。モデルの無い一回限りの見切り発車の列車である。行き先を間違った列車に乗ると大変である。というより、貴重な時間は取り戻しようがなく、無駄な時間を費やしていくのである。時計の針は戻せても、人生の時間は戻しようが無いのである。

波佐文化協会の目指した方向性は、社会教育の推進による町おこしの実践であり、生涯教育の推進であった。特にふるさとの偉人である「能海寛」や「島村抱月」の業績の発掘による顕彰を二十五年間に亘り推進して参りましたが、島村抱月先生については町では、知音都市交流、抱月グリ

ーンパーク構想のもとに推進されており喜ばしいことであります。能海寛については今一歩、行政のバックアップが望まれるところである。

波佐文化協会では平成六年十二月から能海寛の研究の同志を全国に呼びかけ、能海寛研究会を平成七年一月二十二日に結成し、現在では全国二十府県から二百二十名の会員参加となり、能海研究者も年と共に増加の兆しである。

能海寛研究会では、毎年七月に年次大会の開催、奇数月に定例学習会の開催、機関紙『石峰』及び「石峰通信」の発行、講演会・フォーラムなどの開催を実施しております。近い将来には、能海寛記念館の建設運動を推進して、知的国際交流の拠点施設として、中央アジア・シルクロード・チベットの研究施設として、島根県立大学の学外協力施設として、一〇人のチベット探検家のシンクタンクとして、日本の中国西域研究者の交流拠点として、海外とのインターネットによる知的国際交流と三五〇〇点という豊富な能海寛資料の利活用される施設を目指して世界に通用できる施設整備を金城町にと大きな夢とロマンを描いているのである。

これら二名の偉人を顕彰することこそが真に金城町に相応しい町おこしの実践につながるものと確信するところである。

『金城の風土記』発刊

（1998年発行）

山陰中央新報　1999年（平成11年）4月15日（木曜日）

社会教育活動の集大成

「金城の風土記」刊行

能海寛、島村抱月論文も

波佐文化協会

民間主導の生涯学習活動の手法を後世に伝えようと、一年三カ月かけてまとめた金城町内の社会教育活動の集大成「金城の風土記」が、波佐文化協会（隅田正三会長）から刊行された。同町出身の新劇指導者・島村抱月（一八七一―一九一八年）、チベット探検の先駆者・能海寛（一八六八―九〇年）についての研究論文、古代の遺跡紹介など同町の歴史をまとめたほか、四半世紀の公民館活動についての資料を掲載。約六百ページの充実した内容になっている。隅田会長と同協会のスタッフ十人の手による労作。

金城町の社会教育活動の歴史をまとめた「金城の風土記」

内容は一部構成になっており、第一部は「歴史と学ぶ」と題して、古代から現代までの同町の歴史についての論文、紹介文を掲載した。特に島村抱月、能海寛については、全国の第一線の研究者が寄稿しており、興味深い内容が盛り込まれている。

第二部は、同協会が手掛けてきた講座や講演会の様子を伝える機関紙（全）を収録。隅田会長は「内容は全国的にみても誇れるものになった。まったく手本がなかったところからの社会教育活動の実践記録として読んでほしい」と話している。

体裁はB5判、六百十五ページ。初版五百部発行。価格は五千円（税込み）。問い合わせは同協会（電話0855・44・0010）。

山陰中央新報　1999年（平成11年）5月24日（月曜日）　（第3種郵便物認可）

書評

金城の風土記

波佐文化協会編

人づくりに取り組んだ25年

本書は、二十五年間にわたる金城町波佐文化協会（隅田正三会長）の村おこしの記録である。まずは、全体の人づくりから着手し、リーダー育成へと進み、そして村おこしの実践というステップをふんだ取り組みが注目される。この過程を応援してきた二十二人の講師からの提言も、これからの波佐を考えるためには道しるべになるであろう。

波佐文化協会は、町教委の社会教育にタイアップして、昭和四十七年からは成人学級の運営を担当するものとして発足した。同時に自主的な学習活動による地域づくりを呼びかけて、月額三百円の会費で野外研修、文化祭、年始会、座談会、さらには講演会を開催するなどの事業を行ってきた。

とかく行政の補助に依存することが多い生涯学習で、会費制の自己財源をもとに人づくりに取り組んできたことが、波佐文化協会の大きな特色である。いま二つは機関誌の発行であり、成人学級では『はざま成人学級だより』を十年間にわたって継続発行し、昭和五十八年からは『季刊なわて』を二十号まで発行して全戸配布してきた。

その上で昭和六十一年には、一歩を進めてリーダー育成のため、二年間十二回の寺子屋セミナーを開講。月額三千円の会費であるにもかかわらず、五十人の参加を得ている。そして平成元年からは、四年計画のふるさとカルチャーなわて塾の開設へと進む。ここでは四つの専門別研究部会が構成され、講師の助言も得て手づくりの地域振興プランをまとめ上げ、行政に要望書を提出するのである。

村おこしは人づくりから、と考えて取り組んできた二十五年の歩みのなかで、確実に人材は育ってきたし、外からの応援団も広がりをもってきた。波佐出身でチベット探険を行った学僧能海寛についても、全国規模の研究組織に発展させていったが、その中核になっているのは波佐文化協会の人たちである。十年前に能海寛にちなんで設立した寺子屋セミナーの成果であるというべきであろう。

（内藤正中・島根大学名誉教授）

（波佐文化協会＝島根県金城町波佐・電話0855・44・0010、四七六二円）

金城の風土記　第一部

～歴史に学ぶ～

―目　次―

＝巻頭言＝

波佐文化協会二十五周年に寄せて……金城町教育長　西田雅俊

【古代編】

金城町の縄文遺跡・出土品から見た交易関係……島根県文化財保護文化財保護主事　柳浦俊一……1

七渡瀬Ⅱ遺跡・長田郷遺跡に見る歴史的意義……島根大学法文学部教授　田中義昭……7

千年比丘一号墳と畿内大和政権……島根県立八雲立つ風土記の丘学芸主任　大谷晃二……16

【中世・近世編】

久佐郷の人々……浜田市教育委員会主事　原裕司……21

波佐一本松城郭の評価をめぐって……大阪大学文学部教授　村田修三……28

【現代編】

西中国山地の樹林の現状……島根大学生物資源科学部講師　杣村喜則……33

金城の動物誌……西南中学校教諭　田中幾太郎……38

金城特産・淡水魚「カナメ」の誕生について……広島大学水産増殖学部教授　中川平介……46

民具の収集展示に思う……文学博士　石塚尊俊……51

地域における社会教育の振興……早稲田大学名誉教授　山本多喜司……54

社会教育を求めて―むらおこし・まちおこしの発信基地―……広島大学教育学部教授　佐々木正治……59

高齢化社会に対応した文化と福祉……北星学園理事　古和久幸……62

能海寛の非運……東京大学名誉教授　山口瑞鳳……67

明治の冒険者・能海寛……読売新聞海外特派員　江本嘉伸……74

能海寛とシルクロード……島根県立国際短大教授　横田禎昭……79

雲南に消ゆ……民族地理研究室主幸　仲市實……84

テレビカメラが追いかけた能海寛の足跡……アオイスタジオKKディレクター　永堀徹……89

演劇家・島村抱月の近代的意識―芸術座の誕生とその意義―……西南学院大学教授　佐渡谷重信……97

島村抱月の初演出・イプセン「人形の家」……石央文化ホール館長　岩町功……102

「島村抱月」小論……波佐文化協会長　隅田正三……110

金城の歴史ゾーン・波佐地区……島根大学名誉教授　内藤正中……116

金城における観光開発……島根県立高等専門学校名誉教授　島田成矩……121

二十一世紀に金城町へ期待するもの……島根県立国際短大学長　島田雅治……125

表紙の題字は、金城町長安藤美文氏による揮毫です。

金城の風土記　第二部

～ふるさとカルチャー二十五年～

―　目　次　―

はじめに……133

Ⅰ　手づくりのふるさとカルチャー……133

1　公的社会教育の谷間からの出発……133

(1)　成人教育の役割としての社会教育……133

(2)　成人教育と地域住民のコミュニティの復活……134

2　民間指導型の新しい成人教育……134

(1)　波佐文化協会の設立

【講師先生　コメント】　結成十五周年をお祝いして……河野　明……135

波佐文化協会十五周年を祝して……石田　邦夫……136

鉄山と芸術座……岩町　功……137

わたくしの生涯学習……掘　松太郎……138

「楽焼部会」……柳楽　義道……139

地方文化の本当のあり方を見た……亀井　健三……140

書道教室の十年間を振り返って……日野原　正……141

(2)　生涯教育としての『波佐成人学級』の開設……142

昭和四十七年度（第一期）波佐成人学級……145

昭和四十八年度（第二期）波佐成人学級……145

昭和四十九年度（第三期）波佐成人学級……139

昭和五十年度（第四期）波佐成人学級……152

昭和五十一年度（第五期）波佐成人学級……155

昭和五十二年度（第六期）波佐成人学級……159

昭和五十三年度（第七期）波佐成人学級……162

昭和五十四年度（第八期）波佐成人学級……166

昭和五十五年度（第九期）波佐成人学級……168

・アマゾンの博物展へのおさそい……奥原　省一郎……172

昭和五十六年度（第十期）波佐成人学級……174

・ラマの都チベット写真展……176

・写真展にあたって……上野　克二……176

(3)　波佐公民館と共に歩む……179

3　享受型学習からの脱却……182

(1)　ミニコミ誌、季刊『なわて』の発刊……182

(2)　リーダー養成講座『波佐寺小屋セミナー』の開講……183

第一回講座　～　第十二回講座……184

【講師先生　コメント】寺小屋セミナーに想う……佐々木　久子……186

【講師先生　コメント】昭和の松下村塾たらんことを期待する……吉森　護……189

【講師先生　コメント】今一つの仏教……山口　瑞鳳……190

閉講式記念講演

【文化協会長　式辞】波佐寺小屋セミナーの閉講にあたって……隅田　正三……195

【祝　辞】……西田　雅俊……196

【祝　辞】……山本　多喜司……197

【講師先生よりの手紙】……佐々木　正治……199

【講師先生　コメント】……古和　久幸……199

(3)　成人教育活動二十五年の反省と評価……200

【受講生寄稿】十五年を振り返って……田中　タキヨ……201

寺小屋セミナー閉講にあたって……中田　敏幸……202

寺小屋セミナーの修了に……小川　孝……203

寺小屋セミナーを受講して……河野　一秀……204

雑　感……槙田　浪子……204

セミナーを終えて……能海　俊子……205

感じるままに……佐々岡良子……206
セミナーを受講して……前田祥二……207
修了しておもうこと……沖田トシエ……207
寺小屋セミナーの修了にあたって……槇田郁夫……208
セミナーを修了して今、思うこと……上山勝子……209
毎日の生活に感動を……田中奈保子……210
(4) 今後の課題……211
Ⅱ ふるさと起こし事業の推進……212
1 人材と伝統文化の発掘……212
(1) 『郷土の傑人』の顕彰運動……212
【顕彰板除幕式】……214
【献句 献詠】……214
(2) 『田ばやし』の復活……216
【波佐地方の田植え唄】……220
(3) 『新波佐八景』の制定……222
(4) 特集『ふるさと再発見』の企画……222
(5) 常磐山のカシ林の整備……223
2 研究・顕彰・フォーラムによる生涯学習……224
(1) チベット探検家『能海寛』の研究顕彰……224
【チベット探検の先駆者・能海寛】……隅田正三……226
(2) 日本近代劇の父『島村抱月』の幼年期の研究……238
【研究論文】 幼年期の抱月と小国富士……隅田正三……240
(3) 長寿の里トータル・システムづくり……246
【ハード事業（案）】……247
3 参加創造型学習を求めて……248
(1) 哲学の道、文学の散歩道の創設……248
(2) 山岳オリエンテーリングでの城郭学習……249
(3) ホックリングで自然散策と文化財学習……250
(4) 今後の課題……251
Ⅲ 二十一世紀に向かって……252
1 住民の自己教育力の育成……252
(1) ふるさとカルチャー『なわて塾』の創設……252
第一回講座 ～ 第十二回講座……253
【一般公開フォーラム】『観光＆長寿福祉』……255
リレートーク① 「長寿社会に対応する生涯教育と町おこし」 山本多喜司
リレートーク② 「長寿の世紀を迎えるに当たって」……古和久幸
リレートーク③ 「長寿社会に対応する金城の観光」……内藤正中
【専門部会 集約】 自然環境部会・特産開発部会・観光開発部会・長寿医療福祉部会……268
【提言性計画書】 『観光＆長寿福祉』～「観光と長寿福祉」に対する提言～……270
①『能海寛哲学の道』サイクリングコース……272
②『島村抱月文学散歩コース』……273
③『長寿の里トータル・システム』……275
【要望書】……277
(2) 第二次『なわて塾』の開設……279
第一回講座 ～ 第二十八回講座……280
波佐の観光絵地図……285
道の駅事業について……286
金城町を良くするために（今後の課題点）……288
(3) 金城町の観光パンフの発行……290
カチューシャの唄 知音都市交流……290
【金城町の偉人】 島村抱月 能海寛 岡本甚左衛門……291
【島村抱月文学散歩コース】……292
【観光ルートごあんない】……293
・「能海寛哲学の道散歩コース」

金城の風土記

波佐文化協会

・「波佐の歴史街道散歩コース」
・「黒金と和紙の道散歩コース」
・「自然探索の道散歩コース」
(4) 余暇の使い方、活かし方と生涯教育 …… 294
2 地域自立への飛躍 …… 294
(1) 高齢化社会と福祉社会への対応 …… 294
(2) ニューメディアの活用で地域格差の是正 …… 295
(3) 波佐文化協会創立二十五周年記念事業 …… 296
能海寛チベット壮途一〇〇年記念
・写真展「地平線発」―二十一世紀の旅人たちへ― …… 298
スライド&トーク
・「日本人の旅と冒険―二十一世紀へ向けて―」 …… 298
まとめ …… 299
Ⅳ 資料文献
(1) 波佐文化協会事業一覧 …… 300
(2) 新聞掲載記事など …… 304
(3) 『波佐成人学級だより』 …… 332
(4) 『波佐寺小屋セミナーだより』 …… 358
(5) 『なわて塾だより』 …… 380
(6) 波佐文化協会情報 …… 386
(7) 季刊『なわて』創刊号～20号 …… 397
Ⅴ あとがき …… 615

胡弓と楊琴のコンサート

金城で11日 能海寛の訪中100年記念

胡弓と楊琴の中国人演奏家によるコンサートが十一日午後七時から、金城町波佐のときわ会館で開かれる。日本人として初めてチベット探検を試みた町出身の能海寛が、中国を訪ねて百年になるのを記念し、地元の波佐文化協会（隅田正三会長）が企画した。

演奏するのは、胡弓の田川さんと楊琴の陳智蓮さんで、いずれも日本在住。田さんは一九八七年に来日し、陳さんは中国古典民族音楽楽団の一員として数多くの公演をこなした後、九六年から日本でソロ活動を続けている。

胡弓と楊琴は中国伝統の弦楽器。胡弓は馬の尾の毛で作った弓で、楊琴は百五十本以上の弦を二本のスティックでたたいて奏でる。「赤とんぼ」「荒城の月」といったなじみの曲のほか、能海が中国・四川省の金沙江で作った歌「のぞめども」に付けられた曲もオカリナを交えて披露する。

能海は一八六八年（明治元年）、金城町の寺に生まれた。九八年に仏教の原典を求めて日本を出発したが、一九〇一年に志なかばで消息を絶った。

入場料は千円。中学生以下無料。

来月11日、金城で胡弓コンサート

「宵待草」などなじみの曲披露

波佐文化協会（金城町波佐、隅田正三会長）は十月十一日午後七時半から、同町のときわ会館で、中国の伝統楽器・胡弓（こきゅう）、揚琴のコンサートを開く。

日本在住の中国人演奏家・田川さん（胡弓）、陳智蓮さん（揚琴）の二人が来町。「宵待草」「赤とんぼ」「夜来香」「何日君再来」など、日本でなじみの曲を披露する。

田川さんは胡弓演奏のほか、作曲や音楽監督などで幅広く活躍。陳智蓮さんは四川省重慶市から三年前に来日。中国では古典民族音楽楽団の一員として活動。中国音楽家協会重慶市分会会員。日本ではソロ活動をしている。

演奏会は、同地出身の学僧でチベット探検家・能海寛（のうみ・ゆたか、一八六八―一九〇一年と推定）が中国を訪れて百年になるのを記念して開かれる。

入場料は千円。中学生以下は無料。前売り券は二十五日から発売。取り扱い、問い合わせは金城町の今福郵便局（電話0855・42・0300）、波佐郵便局（電話0855・44・0200）。

DENSEN胡弓演奏のタベ

能海寛中国訪問100周年記念

1999.10.11　ときわ開館

山陰中央新報

1999年（平成11年）10月13日（水曜日）

中国楽器で優雅な調べ

金城で演奏会　能海寛訪中100年を記念

中国の弦楽器・胡弓（こきゅう）と楊琴（ようきん）のコンサートが十一日夜、金城町波佐のときわ会館で開かれた。町内外から約百三十人が訪れ、優雅な調べに耳を傾けた。

波佐文化協会（隅田正三会長）が同町出身の学僧・能海寛（一八六八―一九〇一と推定）の訪中百年を記念して開いた。黒竜江省哈爾浜（ハルビン）市出身で岡山県在住の胡弓奏者・田川（ティエン・チュアン）さん、四川省重慶市出身、三年前から日本で楊琴のソロ活動を展開する陳智蓮（チェン・ジーリエン）さんの二人を招いた。

楊琴は箱形の台の上に張った弦を竹製のばちで打つ楽器。

日本語が堪能な田川さんのトークを交え「菊特草」「赤とんぼ」「何日君再来」など日中両国のなじみの曲を演奏。音楽を通して世界平和を願う田川さんのオリジナル曲「星」も披露された。メロディーに合わせ、歌詞を口ずさむ人もいた。

最後の曲は、旅の行く手を阻まれた能海が無念の気持ちを詠んだ和歌に、下関市の男性が曲を付けた「金沙江」。能海寛研究会の副会長・岡崎秀昭さん（＝松江市古志原七丁目＝）がオカリナで参加。三重奏を演じた。

演奏後は観客が胡弓、楊琴に触れた。山内裕子さん（三七＝同町下来原、ホテル従業員＝は「聞いたことがない響き。楽しかった」と話していた。

中国の伝統楽器・胡弓、楊琴にオカリナが加わった三重奏

島根県 金城町(現・浜田市)

2000 年受賞

波佐文化協会

チベット探検家・能海寛の顕彰と生涯教育を通じたコミュニティ活動を推進

代表:隅田 正三 氏(2000 年 5 月更新)

能海寛中国訪問 100 周年記念コンサート

島根県金城町波佐地区は、広島との県境にほど近い中国山地の山あいに広がる世帯数約 270 戸の集落である。この地域は昔から幾度も風水害に見舞われ、それを乗り越えてきた人々の間には強い団結力が培われてきたという。

しかし戦後は御多分にもれず、波佐でも出稼ぎ・離村・過疎が進み、地域の連帯感が薄れつつあった。1972 年、これを憂へた3人の有志が資金を持ち寄り、波佐文化協会を設立した。協会の目的は"生涯学習による町おこし"。爾来 30 年近くにわたる波佐文化協会の活動は、大きく次の4期に分かれる。

第1期は、働く人たちが夜間に学ぶための成人学級の開講。書道、茶道、文芸、陶芸、絵画、郷土史など、受講料は1回(2時間)100 円だった。当初は小学校の教室や消防署の倉庫を借りていたが、受講者の熱意に押されて、金城町は波佐地区に町で最初の公民館を建設した。波佐文化協会による成人学級は 10 年間続き、延べ 1500 人がここで学ぶ。この生涯学習講座は 82 年から町の社会教育事業として引き継がれた。

第2期は、1982 年から 93 年にかけての機関誌「なわて」の発行。「なわて」とはあぜ道のことである。"明るいまちづくりをめざすコミュニケーション誌"と銘打ち、全戸に無料配布。地元の各種グループ紹介や文化財探訪、日本近代演劇のパイオニア島村抱月やチベット探検の先駆者能海寛など金城町出身の偉人の生涯や業績の紹介、環境問題など、地域に密着した情報を特集を組んで掲載した。

第3期は 1986 年から、「なわて」の発行と平行して、地域活動や職場のリーダーとなる人材を育成する「波佐寺小屋セミナー」を開催。続いて 90 年からはより実践的な学習会「なわて塾」を開講し、古墳の発掘調査、島村抱月と能海寛の顕彰、観光パンフレットの作成、町への地域振興プラン提言などを行った。

第4期の活動は、1995 年に設立した「能海寛研究会」を中心に展開されている。研究会メンバーには町内の住民だけでなく、全国の学者や研究者が多数名を連ねている。能海寛は日本仏教の再生を願い、経典を求めて明治期に中国からチベットに向かい消息を絶った。しかし、波佐文化協会の努力により、彼が実家に送り届けた旅日記や仏像・仏具など千数百点の遺品が同地区で発見された。研究会では、これらの遺品の整理や調査・研究を行うとともに、仏教哲学、民俗学、中国語・チベット語などの言語学をはじめ 62 項目にわたる幅広い領域を学習し、「能海学」を構築することを目指している。会員の研鑽の場である研究会のほか、内外の研究者を招いての講演会や音楽会、写真展を開催してきた。さらに本年8月には能海寛訪中 100 年を記念し、中国で日中合同の研究発表を通じた国際交流を計画している。

長い歴史を持つ波佐文化協会の多彩な活動は、自ら学び、互いに研鑽しあう"生涯学習"を通じて、精神的な豊かさと結びつきを育むユニークなコミュニティ活動である。

サントリー地域文化賞受賞団体
サントリー地域文化賞受賞
２０００年

神奈川県「ヨコハマ映画祭」
静岡県「浜松交響楽団」
島根県「波佐文化協会」
愛媛県「富士華道大正ロマン館」

第22回サントリー地域文化賞贈呈式（2000年6月23日・大阪全日空ホテル）

写真左より山陰中央新報社（山下宏二氏）、岡山大学（佐々木正治教授）、波佐文化協会（岡本正儀）、波佐文化協会（隅田正三）、ジャーナリスト（江本嘉伸氏）、京都文教大学（高山龍三教授）、金城町長（安藤美文氏）、贈呈式に参列される。

2000年(平成12年)5月18日　木曜日
朝日新聞

生涯学習で町おこし 28年の積み重ね 評価

金城の波佐文化協会 サントリー地域文化賞に

今夏には中国で研究大会を予定

「受賞 活動に励み」

地域の文化向上や活性化に貢献した個人や団体に贈られる第二十二回「サントリー地域文化賞」（サントリー文化財団主催）を金城町の波佐文化協会（隅田正三会長）が受賞することが決まった。生涯学習を通じた地域活動や、同町出身のチベット探検家、能海寛に関する調査活動などが評価された。一九九九年の出雲歌舞伎「むらくも座」に続き県内では二年連続、五団体目の受賞となった。

今回選ばれたのは、波佐文化協会を含め、横浜市の「ヨコハマ映画祭」など全国で五団体。全国の新聞社や放送局から推薦を受けた後、現地調査などにより審査した。

波佐文化協会は、生涯学習で町おこしを図ろうと一九七二年に地元の人が設立。経費を出し合い、郷土史、園芸など夜間の成人学級を運営してきた。また、広島大学などの協力を得て「波佐寺小屋セミナー」や「なわて塾」などを開き、地域リーダーの育成に努めてきた。同町出身の能海寛の研究には、全国から学者らが参加する研究会を作り、二カ月に一回学習会を開いている。

今年は、能海寛中国訪問百周年記念事業として、八月に中国寧夏回族自治区銀川市を訪問し、研究大会を開く予定。隅田正三会長は「二十八年間続けてきて、生涯教育で町おこしができるとわかった。協会は身銭を切ってやってきたが、これを励みに一層頑張りたい」と受賞の喜びを語った。

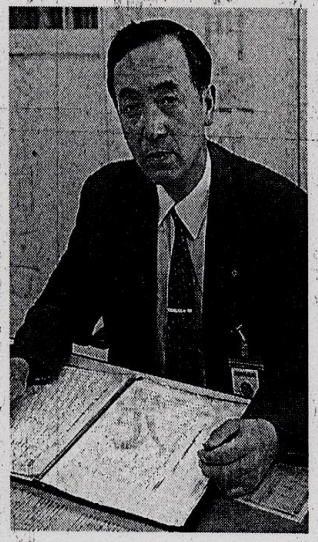
贈呈式は六月二十三日に大阪市北区の大阪全日空ホテルである。

波佐文化協会が能海寛中国訪問百周年を記念して主催した中国楽器のコンサート／写真提供・サントリー文化財団＝金城町のときわ会館で

山陰中央新報
2000年（平成12年）5月26日（金曜日）

ひと

学ぶ楽しさを伝え継ぐ



サントリー文化財団「地域文化賞」を受賞した波佐文化協会会長

隅田 正三さん

昭和四十七年、西中国山地の山々に囲まれた島根県金城町波佐の里で、生涯学習をテーマに掲げた同協会が産声を上げた。

当時、山間地では、冬になると出稼ぎで家を離れる人も多く、今のように公民館で趣味を楽しむような発想が定着していないころのことだ。

以来二十八年、夜間成人学級、講演会、出版事業を通じて、学ぶことの楽しさを言葉だけではなく、実践で伝えてきた。

百年前にチベット探検に赴いた学僧・能海寛、新劇の父・島村抱月など郷土輩出の先達が残した資料を活用した地域独自の学習活動、その継続性が認められ、全国五つの受賞団体に選ばれた。

三代目の会長として会を切り盛りする隅田さんは「当初から受益者負担で運営してきたことが成功につながった。学習会の参加者を含め、応援してくれた人々のおかげ」と受賞を喜ぶ。

郵便局長という要職を務めながら会を運営する。昨年春、これまでの活動の集大成となる「金城の風土記」を出版した際は、夜が更けてからの整理、校正作業の毎日。「普段の仕事を人一倍してこそ、活動が認められる」が持論だ。

受賞記念事業として、波佐の地から海外に活路を見いだそうとした能海をテーマにした漫画を出版することなどを考えている。

すみた・しょうぞう　昭和四十七年八月に、他の二人とともに出資して波佐文化協会を立ち上げる。六十一年から会長。同会の活動をベースに、平成七年には全国組織の能海寛研究会を発足させ、現在事務局長を務める。著書に『チベット探検の先駆者　求道の師　能海寛』など。今福郵便局長。島根県金城町波佐。五十八歳。

2000年ときわ会館にて

第２２回サントリー地域文化賞
受賞祝賀パーティー

「サントリー地域文化賞」受賞の波佐文化協会活動を「ルック・ジャパン」が英文掲載

LIVES OF QUIET DEDICATION

Postmaster Sumita Shōzō and monk Noumi Yutaka: native sons of Kanagi, separated by a century, whose respective roads less-traveled cross

IN the mid 1960s, modernization began to sweep over Japan, urbanizing the country side and bringing mechanization to the farms. Sumita Shōzō (now 58) was one who grew to feel more than a little nostalgic for the old days.

The post office worker (now postmaster, Imafuku Post Office, Kanagi), a keen local historian, took it upon himself to prevent the workaday signs of rural Shimane-ken (prefecture) from disappearing. In November 1968 he rallied support from likeminded Kanagi citizens—Sumita had earlier formed a study group dedicated to researching local history—to establish a group that would collect and preserve local farm implements and other accoutrements that were characteristic of the traditional way of life. In 1969 this group received donations of approximately 2,500 items, and over the next two years its members would file the necessary paperwork to have many of these items designated "important folk materials" by the prefectural and national governments.

Sumita and his colleagues continued their efforts, establishing the Folk Materials Museum in 1973 and the Historical Folk Materials Museum in 1978. This latter project involved the restoration of a building belonging to the 190-year-old local ironworks. During this time, they also advocated "practical ethnology" programs that focused on recreating and photographing scenes from traditional life to record how the various implements were actually used.

Passionate in their interest in local history, Sumita and his colleagues wanted others to have the opportunity to share their enjoyment and learn more about local history. In August 1972 they invested their own money to establish the Haza Culture Council (named after Haza, a local place name), which is dedicated to adult learning. In addition to its curricula activities, which center on year-round history courses, the Council has organized or been involved in many diverse activities in the name of cultural protection and community revitalization. These include: sponsoring 11 annual culture festivals, developing community center programs, participating in the excavation of 10,000-year-old stone implements, conducting surveys on ancient castle ruins and other historical sites, securing designation of those sites as cultural properties,

HISTORY MEN: *Members of the Haza Culture Council, a recipient of the 2000 Suntory Prize for Commun Cultural Activities. Sumita Shōzō stands center.*

conducting biographical research on the lives of two local luminaries (Shimamura Hōgetsu [1871–1918], known as the father of modern theater in Japan; and Noumi Yutaka [1868–1901]), and erecting a memorial plaque for the two men. For 10 years beginning in 1983, the Council published a quarterly magazine, *Nawate* (named after the footpaths between rice fields, which were the first roads), freely distributing copies to all households in the Kanagi area. For a number of years the Council also conducted programs to train leaders for community activities (Haza Terakoya Seminar) and supervised special classes on rural culture (Nawate Juku).

The Haza Culture Council was awarded the 2000 Suntory Prize for Community Cultural Activities in recognition of its work.

ENCOUNTER WITH NOUMI YUTAKA

Of all the many activities Sumita has been involved in over the years, perhaps the work that has brought him most recognition as a historian is his research into the monk-scholar Noumi Yutaka, a native son of the region and one of the first Japanese to explore Tibet.

"I first got interested in Noumi Yutaka in 1968," Sumita recalls. "As I have described, I was a young man absorbed in collecting folk materials. At that time we didn't have the rich sources of information about Tibet that we have today. It was extremely difficult to find out anythir about Noumi, especially his early years. kept chipping away at the project, thoug and began to publish my results."

Sumita published his findings i installments in *Nawate*, beginning i 1985, and in 1989 published the collecte articles in a book entitled, *Noumi Yutak Pioneer Explorer of Tibet and Seeker the Spiritual Path*.

The following is taken from the for word of that book.

"The autonomous region of Tibe known as the 'roof of the world,' was lon shrouded in a veil of isolation. Many valu able lives were lost by intrepid explore who tried to pierce that veil for the sake c Buddhist scholarship and trade. One c them, a man named Noumi Yutaka, was monk at Jōrenji temple of the Ōtani branc of the Jōdo Shin sect. Born and raised i Kanagi, Shimane-ken, he was the firs Japanese to try to enter Tibet.

"Noumi Yutaka's journey is a grea event in the annals of Japanese Buddhis history. He sought the complete collectio of Buddhist Sutras, Laws, and Treatise written in Tibetan (known in Japanese a the *Daizōkyō*), which is the original tex for many of Buddhism's central concepts His plan was to translate them into Englisl so that Buddhism could be propagated a one of the world's great religions, and h was the first to actually begin translating them himself. He searched for the truth and risked his life on the basis of a plan that was both immense in scope and finely detailed. Knowing what this unparalleled great man accomplished provides us all with a unique and precious opportunity to learn what it is to lead an exemplary human life."

Let's examine Noumi's remarkable life, following the chronology pieced together by Sumita.

Noumi Yutaka became a monk at Higashi Honganji temple in Kyoto when he was 11 years old. Later, he met the eminent Buddhist scholar Nanjō Bun'yū, who became his mentor and had a deep philosophical influence. During the Meiji period (1868–1912), anti-Buddhist government policies threatened the very existence of Buddhism in Japan; it was during this time that the 19-year-old Noumi announced his intention to go to Tibet to discover the true nature of Buddhist faith. He knew he would have to be thoroughly prepared to succeed. Therefore, he studied Tibetan at age 20, and, beginning at age 21, spent two years studying philosophy, English, and Sanskrit at the Tetsugakukan (Academy of Philosophy, now Toyo University). At age 23 he entered Keio Gijuku (now Keio University) where he received instruction directly from academy founder Fukuzawa Yukichi. After completing his studies there, he returned to the Academy of Philosophy to pursue research in his field of specialty, East Asian cultural history. He received instruction directly from the academy founder, Inoue Enryo, over a period of three years. Meanwhile, mindful of the arduous physical challenge that awaited him in Tibet, Noumi engaged in various physical training exercises, including the solo climbing of Mount Fuji. In 1893 he graduated from the academy, and published his graduate thesis, *Buddhists in the World*, at his own expense. In that book, he identified the need for an English translation of Buddhist texts, and outlined his grand plan to unify all of the world's 500 million Buddhists. In 1898 he was married in his home village; soon after, however, he received permission from Higashi Honganji temple to go to Tibet. Though he had only been married for three months, he decided to go, leaving his wife Shizuko behind in Japan. Beginning in April 1899, Noumi went on three expeditions to Tibet in two years. He managed to actually enter Tibetan territory twice, but he never made it to the capital city of Lhasa. The last message received from him was a letter dated 18 April 1901, which he wrote in Yunnan province, China.

VALUABLE RECORD: *Four of the 52 sketches Noumi Yutaka did of the Yangtse river's Three Gorges*

CHINA-JAPAN JOINT WORLD CONFERENCE

In August 1986, about 800 items were discovered stored in 10 coal boxes in a separate residence on the premises of Noumi's family home. The boxes had not been opened in about 80 years. "As I examined each item, I couldn't help getting very excited," Sumita recalls. "These were first-rate historical materials that filled in all of the gaps in Noumi's life in a single stroke."

Sumita and his colleagues classified and organized the materials and put them on public display in the Historical Folk Materials Museum. In January 1995, they also organized the national Noumi Yutaka Society with members that included local residents as well as researchers from all over the country. In July of that year, they published the first issue of their society bulletin, *Sekihō*, thus taking their first step toward creating the field of "Noumi studies," which covers a wide range of academic disciplines. In November 1996, another large collection of historical materials was found in the archives of the main hall of Jōrenji temple. This great discovery completely clarified Noumi's travel itinerary in mainland China, and provided invaluable material not only for the Noumi Yutaka Society, but also for all researchers interested in central Asia.

"They're building a huge dam now on the Yangtse river in China. We have 52 sketches that clearly show what the Three Gorges area looked like a century ago," Sumita continues. "Noumi's records of China include 61 items in 10 categories that include geography, history, politics, religion, and local customs. These records were written in a very methodical and steady manner and are of tremendous historical value today. We plan to strengthen our connections with researchers in China, Japan, and other countries to make these materials more available for public use."

NOUMI SPIRIT: *Delegates at the Noumi Yutaka Society China-Japan World Conference, Yinchuan, August 2000*

In August 2000, Sumita and his colleagues sponsored the Noumi Yutaka Society China-Japan Joint World Conference to commemorate the 100th anniversary of Noumi's visit to China. The conference was held in Yinchuan, the capital city of the Ningxia Hui Autonomous Region in China. Some of China's most prominent scholars attended the conference as special guests. Many of the citizens of Yinchuan were deeply impressed by Noumi's spirit, which allowed him to overcome unimaginable obstacles in his quest to seek out Buddhist scriptures a hundred years ago, when it was virtually impossible for any foreigner even to walk unaccompanied in Ningxia. His intrepid fortitude won the admiration of many Chinese who became members of the Society.

Sumita hopes that the Society will be the focal point of "Noumi studies," fostering international, intellectual exchange among the younger generation. 2001 marks the 100th anniversary of Noumi's disappearance. The Society plans to establish a web site in hopes of dramatically enhancing and developing its research network. There are hopes that steps for materializing one of Sumita's dreams, establishing a "Noumi Yutaka Memorial Museum," may be accelerated.

"Noumi dedicated his life without regret to fulfilling his dream and realizing his great ideals," Sumita concludes. "He has a very valuable lesson to teach us." Through his many projects and community activities, Sumita himself embodies that quest for human fulfillment.

BY **NISHIMURA Kunio**

ルック・ジャパン中国語でも掲載

默默奉献

金城的子孙：邮便局长隅田正三与高僧能海宽，相隔一个世纪却心心相连。

在1960年代中期，乡村城市化和农业机械化的现代化建设席卷整个日本。隅田正三（现年58岁）十分怀念旧日的时光。

这位邮政工作者（现任金城今福邮便局长）是一个热心的地方史爱好者。他以保留具有田园风光的岛根县的特征为己任。1968年11月，他得到了具有同样想法的金城居民的支持，成立了一个小组，收集具有传统生活特色的地方农业器具和服装。在此之前，他创建了一个小组专注于研究地方历史。在1969年，他们收到了将近2,500件捐赠品。在以后的两年，他们完成了必要的文字整理工作，使这些文物被指定为县级和国家级“重要民间文物”。

热爱历史的人们：*波佐文化协会成员，2000年社区三得利地域文化赏获得者。中间站立者为隅田正三。*

隅田和同事们继续努力，分别于1973和1978年建立了民俗资料馆和历史民俗资料馆。后一项工程包括翻新属于一家具有190年历史的铁厂的一座建筑。在此期间，他们倡导了“实用人类文化学”计划，致力于传统生活方式的再现和拍摄记录那些器具的使用方法。

隅田和同事们对地方史充满热情，他们想让其他人分享他们的乐趣并从中学习更多的地方历史。1972年8月，他们自己投资成立了致力于成人教育的波佐文化协会（用地名波佐命名）。除了常年不变的以历史课为主的授课活动外，理事会还组织或参与了丰富多采的旨在文化保护和社区建设的活动。其中包括：赞助11次年度文化节、发展社区中心、参与发掘具有1万年历史的石器、调查古城堡遗址及其他历史遗址、确保这些遗址被列为文化遗产、调查当地两位文化名人（日本现代戏剧之父岛村抱月[1871－1918]和能海宽[1868－1901]）的生平。从1983年开始的10年内，理事会出版了一份季刊《環》（以最早的路：稻田间的小路命名），免费分发给金城地区的每户居民。理事会连续几年培训社区活动领袖（波佐小屋研讨会）并指导有关乡村文化的特别讲座（環塾）。

波佐文化协会被授予2000年社区三得利地域文化赏。

研究能海宽

这些年内隅田参加了很多活动，而他能被赞誉为历史学家主要是因为对佛教学者能海宽的研究。能海宽在这个地区土生土长，是第一位到西藏探险的日本人。

隅田回忆说：“我在1968年开始对能海宽感兴趣。像我以前说过的，我那时是一个热衷于收集民间文物的年轻人。那时我们没有像现在这样多的有关西藏的资料。搜集能海宽的生平资料是极端困难的，尤其是早期资料。然而我没有放弃，并开始发表研究成果。”

从1985年开始，隅田开始在《環》杂志连载其研究成果。在1989年出版了一本专辑，书名为《能海宽：探索西藏的先锋和精神探寻者》。

下面的文字摘自这本书的前言。

“被称为‘世界屋脊’的西藏自治区一直蒙着一层神秘的面纱。为了学习佛教或从事贸易，很多无畏的探险者失去了宝贵的生命。其中之一就是能海宽，一位净土真宗大谷派净莲寺的僧人。他出生并成长于岛根县的金城，是第一位尝试到西藏的日本人。”

“能海宽的旅行是日本佛教史上的壮举。他是为了寻找佛教核心思想的原文：用藏文书写的佛教经典、戒律及论述（在日本被称为大藏经）。他计划将其译成英文从而使佛教作为世界最伟大的宗教之一发扬光大。他也是第一位翻译佛教经典的人。他探寻真理，并以其生命投入到一项既有广度又有深度的计划之中。了解这位伟人的成就，是一个独特而珍贵的机会教我们如何通向充实和有意义的人生。”

让我们根据隅田搜集到的资料，回顾一下能海宽不寻常的人生历程。

能海宽在11岁时就到京都的东本愿寺出家为僧。后来他遇到了杰出的佛教学者南条文雄。南条文雄成为他的导师并在哲学上深深地影响了他。在明治时代(1868－1912)，反佛教的政策威胁到日本佛教的生存。正是在这段时间，19岁的能海宽决定要到西藏去探索佛教的真谛。他知道要成功就要做充分的准备。为此，他在20岁时开始学藏文，从21岁开始他花了两年的时间在哲学馆（现在的东洋大学）学习哲学、英语和梵语。23岁时，他进入庆应义塾（现在的庆应义塾大学）直接接受其创建者福泽谕吉的教诲。学习结束后，他重回哲学馆继续从事东亚文化史的专业研究工作。在三年多的时间内，他一直接受哲学馆创建者井上圆了的直接教导。考虑到去西藏探险所面临的严峻的身体挑战，能海宽同时进行各种各样的身体锻炼，包括单独攀爬富士山。1893年他从哲学馆毕业，并自费发表了毕业论文《世界的佛教徒》。在这本书中，他指出了把佛教经典翻译成英语的重要性，并概述了他统一全世界5亿佛教徒的宏伟计划。1898年，他在家乡结婚。不久，他从东本愿寺得到了去西藏的许可。尽管他结婚只三个月，他还是决定离开新婚妻子静子。从1899年开始的两年内，他三次远征西藏。其中两次，他成功地进入了西藏，但从未到达西藏首府拉萨。有关他的最后的消息是他于1901年4月18日在中国云南写的一封信。

极具价值的记录：*52张草图中的4张是关于长江三峡的。*

中日联办国际会议

1986年8月，在能海宽家的另一处居所里发现了10个煤箱，里面有大约800件物品。这些箱子在大约80年内从未打开过。隅田回忆说：“当我检查那些物品时，真是高兴极了。这都是些一流的历史文物，一下子填补了能海宽生平的所有空白。”

隅田和同事们分类整理了这些文物，并在民间历史文物博物馆向公众展出。1995年1月，他们成立了全国能海宽学会，成员包括当地居民及来自全国各地的研究人员。同年7月，他们发表了学会的第一份报告：石峰，为建立涵盖多个学科的“能海宽学”迈出了第一步。1996年11月，在净莲寺主殿的档案里发现了大量的历史资料。这一伟大发现完全澄清了能海宽在中国大陆的旅行路线，它不仅为能海宽学会，也为对中亚感兴趣的研究人员提供了宝贵资料。

能海宽精神：*能海宽学会中日联办国际会议的代表，银川，2000年8月。*

隅田继续说：“中国正在长江建一道大坝。我们有52张草图清楚地画出一个世纪以前三峡地区的地形。能海宽有关中国的记录有10类61项，包括地理、历史、政治、宗教和地方习俗。这些记录极有条理且样式统一，这在今天仍有极大的历史价值。我们计划加强中日和其他国家研究人员的联系，使这些资料供公众使用。”

隅田和同事们在2000年8月赞助了能海宽学会中日联办国际会议以纪念能海宽访问中国100周年。会议在中国宁夏回族自治区首府银川举行。一些卓越的中国学者作为特约嘉宾出席了会议。100年前，很多银川居民被能海宽的精神所深深打动，允许了他克服难以想象的艰难险阻去寻找佛教经文的请求，当时外国人若无向导在宁夏旅行几乎是不可能的。他的无畏和坚韧赢得了很多与会中国人的钦佩。

隅田希望学会成为研究“能海宽学”的中心，鼓励年轻一代之间的国际文化交流。2001年是能海宽失踪100周年。学会计划设立一个网站，希望能极大地加强及发展其研究网。为了实现能海宽的梦想之一，建立“能海宽纪念馆”的计划将加速进行。

隅田总结说：“能海宽无悔地奉献出生命以实现他的梦想。他给我们提供了极具价值的经验。”通过他的项目和社区活动，隅田自己也在实现他的人生价值。

西村邦雄

中国寧夏回族自治区銀川市・外事弁公室講堂

銀川一中の皆さん
郷土の
祝

『まんが西蔵探検家　能海寛』

●B5判 総158頁 本体価格2,000円＋税

『まんが　西蔵探検家　能海 寛』

■ 実践社会教育活動25年の集大成既刊本 発売中！

金城の風土記　波佐文化協会編

● B5判　総615頁　定価5,000円
（本体価格4,762円＋税）

まんが西蔵探検家 能海寛
出版発表会

まんが「西蔵探検家 能海寛」完成

業績と志を顕彰

本のモチーフとなった浄蓮寺の白木蓮
明治三十一年、能海寛と妻静子によって植えられ、金城町の天然記念物に指定されている
高さ九メートルを超えるその大きさもさる事ながら、春に咲く花は、能海寛の志のように気高く、そして美しい

原作とシナリオを担当した江本嘉信さん

作画を担当した南一平さん

西蔵探検家として知られる能海寛の没後百年を記念し、その業績を顕彰するため波佐文化協会が企画し、製作を委託していた、まんが「西蔵探検家能海寛」が完成し、八月二十四日、エクス和紙の館で出版発表会と祝賀会が開催されました。

まんが「西蔵探検家能海寛」は、記載された文章には全てふりがなが振ってあり、能海寛の誕生から西蔵での最期までを描いたマンガ百二十ページと、巻末付録として略年譜や詳細な資料を掲載し、一千部を出版。事業費は三百八十万円で、平成十三年度の「しまね文化ファンド」助成金と自己資金を充てています。

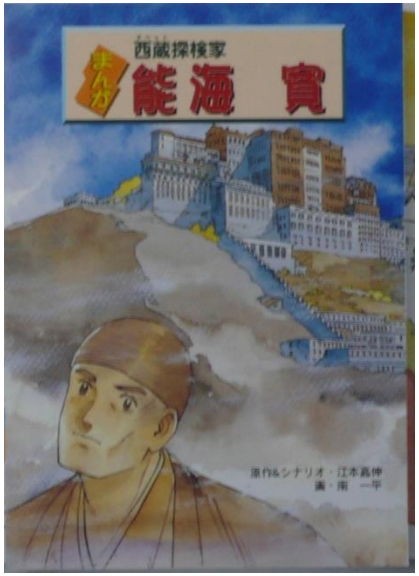
出版発表会で原作とシナリオを担当した江本嘉信さんは「旅立つこと、檀家を持つ悩み、なぜ西蔵へ惹かれたのかを表現したかった。まんがは架空のストーリーになりがちだが、この本は本格的な内容になった。皆さんの熱意が生んだ作品」と発表に際してコメントしたほか「能海寛の志から学ぶものは自分自身。身のまわりのさまざまなことを学びとるきっかけの一つ」と能海寛の生涯から学ぶことが多いことを強調していました。

また作画を担当した南一平さんは「能海寛の話を聞き、素敵な人だと思い引き受けた。浄蓮寺に咲く満開の白木蓮をキーワードにして、亡くなるシーンを描かないことで、彼の精神が生き続けていることを表現したかった。楽しんで読んでもらいたい」とコメントしました。

まんが「能海寛」は、町内の小中学校、公民館と町立図書館に寄贈されたほか、波佐文化協会が十・月から三月にかけて奇数月の土曜日に親子学習会を開催する際の教材として利用される予定です。

◆本に関する問い合せ
波佐文化協会
☎四四―〇〇一〇（隅田）

波佐文化協会
隅田正三会長



まんが 西蔵探検家 能 海 寛
出版記念祝賀会

まんが 西蔵探検家 能海寛
出版記念祝賀会

山陰中央新報
2002年（平成14年）11月6日（水曜日）

親子学習塾のテキストに使われる漫画本「西蔵探検家　能海寛」

能海寛の生き方学んで

9日から金城で「親子塾」

島根県金城町の民間文化団体・波佐文化協会と能海寛研究会は、同町出身のチベット探検家、能海寛（一八六八―没年不詳）の事跡を分かりやすく解説する親子学習塾を、今月から来年三月まで三回開く。仏教人として地方から世界を見据えた能海の生き方を広く知ってもらうのが狙い。

同協会は八月、能海の一生を漫画化した「西蔵探検家　能海寛」を出版。学習塾は漫画本をテキストに、能海が仏教の経典を英語に翻訳をして世界に知らしめようと思い立ち、チベットに向かった経過や時代背景を学ぶ。

約五十回の学習会を重ねる能海寛研究会が学習塾をサポート。会員が講師役を務めたり、資料の提供をする。同協会の隅田正三会長は「漫画本の出版を機会に、能海の生き方を学ぶ人が増えてほしい」と期待する。

第一回は同町波佐のときわ会館で九日午後一時半から。対象は小学生以上。受講は無料だがテキスト代（漫画本）として二千百円が必要。申し込みは波佐公民館（電話0855・44・0146）。当日参加も可能。

2002年（平成14年）11月8日（金曜日）
讀賣新聞

テキストに使われる「まんが西蔵探検家能海寛」

チベット探検の先駆者

能海寛に学ぶ

9日から出身地金城で親子学習塾

金城町出身で、国内のチベット探検の先駆者である能海寛（一八六八―一九〇一年）の生涯を易しく学ぶことができる親子学習塾が、九日から同町波佐のときわ会館で始まる。今夏に「まんが西蔵探検家能海寛」を出版した波佐文化協会や、能海寛研究会などが企画。同漫画をテキストに、来年三月までの計三回開き、能海の生き様や考え方を探る。

同学習塾は、能海寛研究会員らで定期的に開いている学習会に位置付け、能海について一から学びたいという人や子供たちにも理解しやすい内容にし、会員が講師を務める。内容は、仏教の原典を求めてチベット領に入り、三回にわたって探検したルートを追いながら、残した紀行文や論文などを読み、生い立ちも手がかりにして人柄にふれる。

波佐文化協会の隅田正三会長は「常に良き師を求め、チャレンジ精神で高い目標を掲げる姿勢を、今の子供たちに呼び起こすきっかけになれば」と話している。

一回目は九日午後一時半から。小学生以上が対象で、受講は無料。申し込みや問い合わせは波佐公民館（0855・44・0146）へ。

中国新聞　2001年（平成13年）4月17日（火曜日）

ねしま

能海寛の冒険心 子どもたちへ

チベット探検の生涯漫画に

金城の文化協会

没後100年 年内出版

チベット探検の先駆者能海寛（一八六八―一九〇一年？）の生涯をたどる漫画を、生家のある金城町の波佐文化協会（隅田正三会長）が年内に出版する。チベットで消息を絶って今年で百年になるのを記念し、子どもたちにも能海の業績をPRするのが狙いだ。

能海寛の漫画出版について説明する隅田会長㊧と江本さん㊨

能海　寛

漫画本のタイトルは「まんが　西蔵探検家能海寛」。A4判、百二十㌻で、カラーと白黒を併用する。うち三十㌻は能海の写真や、生前に書き残した資料などを掲載。笠岡市在住の漫画家南一平さん(五四)が漫画を担当、原作は東京在住の作家江本嘉伸さん(六〇)が、著書「能海寛　チベットに消えた旅人」から書き下ろす。

能海は同町長田の真宗大谷派浄蓮寺に生まれ、十一歳で得度。十九歳で仏教の原典を求めるチベット探検を決意した。慶応義塾から哲学館（現在の東洋大）に転入し、伊豆七島などをめぐって訓練を積んだ。三十二歳の時、当時のチベット領のパタンに日本人として初めて入国した。

漫画では、鎖国状態のチベットに三度も向かった能海の探求心を、旅好きだった幼少時代からユーモラスに描く。モンゴル語や英語、サンスクリット語など四カ国語を学んだひたむきな姿勢も浮かび上がらせる予定だ。

初版二千部は、約三百五十万円かかる見込み。江本さんは「未知のものに果敢に挑む能海のような偉人が石見にいたことを、多くの人に知ってほしい」。隅田会長は「能海のような冒険心や夢、希望を持った子どもたちが一人でも増えれば」と張り切っている。

金城の文化協会　学習会スタート

刺激いっぱい 能海寛の生涯

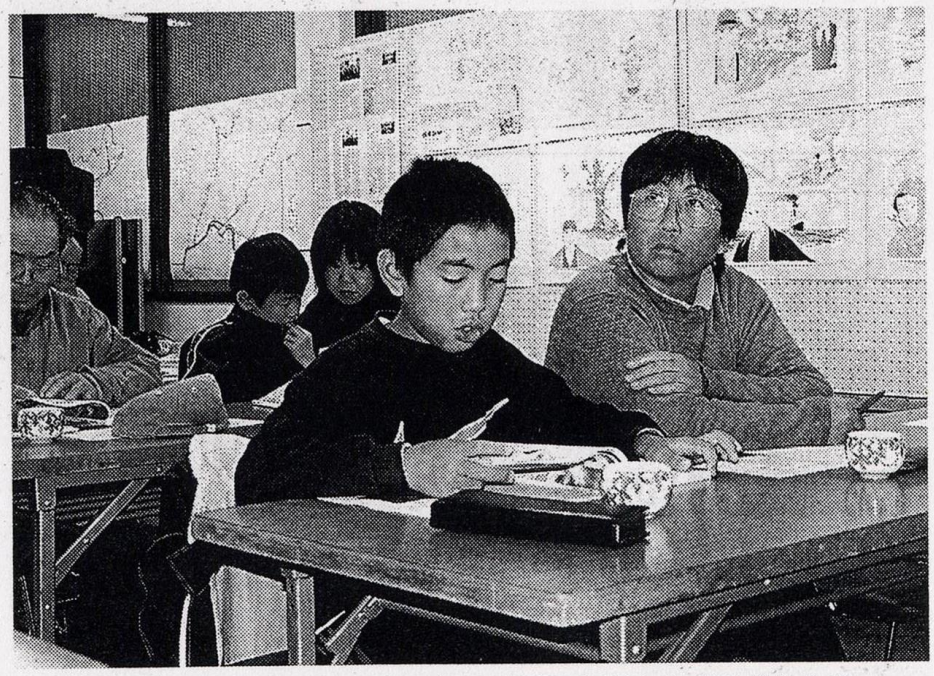
教材に漫画 偉業たどる

チベット探検の先駆者・能海寛をテーマにした学習会が9日、生家のある金城町のときわ会館で始まった。今年の夏、「まんが　西蔵探検家　能海寛」を出版した波佐文化協会（隅田正三会長）などが漫画をテキストに、年度内に計3回開く。初日はチベットに旅立つまでの足跡をたどり、能海の生きざまや人柄について考えた。

「漫画を教材に能海の生涯をさらにわかりやすく伝えたい」との呼び掛けに、同町の小学校の親子や校長ら約二十人が集まった。能海やその恩師らの配役を決めて漫画本を朗読した後、隅田会長の話に耳を傾けた。

朗読で能海を務めたのは、波佐小六年の岡田翔治君（一二）。仏教の原典を翻訳するために、四カ国語を学んだり、子どもに読み書きなどを教えたりした青年期の能海になり切った。「たくさん本を読んだことも、たった一人でチベットにまで行った勇気もすごい。見習わないといけないことがたくさんある」と刺激を受けていた。

今後は、三十四歳で消息を絶つまでの足跡をたどる。探検したルートを漫画や史料で追いながら、能海と彼を取り巻く人間模様や時代背景などに迫る。能海が残した探検紀行文や論文も参考にする。



能海寛をテーマにした学習会で、漫画を朗読する子どもたち

2002年（平成14年）8月26日（月曜日）　中國新聞

能海寛の生涯

金城の文化協会

漫画出版

チャレンジ精神受け継いで

チベット探検の先駆者・能海寛の生涯を描いた漫画「まんが　西蔵探検家　能海寛」を、生家のある金城町の波佐文化協会（隅田正三会長）が出版した。二十四日に同町で出版記念祝賀会があり、町内の教育機関などの代表者に贈られた。

能海は一九二六年、同町長田の真宗大谷派浄蓮寺に生まれた。慶応義塾や哲学館（現在の東洋大）などに通い、十九歳で仏教の原典を求めるチベット探検を決意。当時鎖国状態だったにもかかわらず仏典の翻訳に成功したが、三度目の探検中の三十四歳の時に消息を絶ったとされる。

漫画は原作、シナリオを東京在住の作家江本嘉伸さんが、絵を笠岡市の漫画家南一平さんが担当。書物や自然に好奇心おう盛だった幼少時代や外国語習得に励む姿などが柔らかく表現され、隅田会長は「小中学生にも分かりやすく伝えたいという協会の趣旨にぴったり」と喜んでいる。

出版記念祝賀会には約四十人が出席し、江本さんは「漫画が子どもたちが何かに情熱を注ぐきっかけになれば」と期待。隅田会長が町内の小中学校の校長や公民館長に漫画を贈呈した。

教材に学習会も計画

隅田会長らは「能海のチャレンジ精神を子どもたちに受け継いでほしい」と、十一月から隔月で計三回、漫画を題材にした学習会を広く町内の親子対象に開く。

漫画はB5判、百五十七ページ。巻末で能海の足跡を写真や略歴で紹介。漢字にはすべて振り仮名がある。二千部を製作し、一部を浜田市内の書店で販売している。税別二千円。

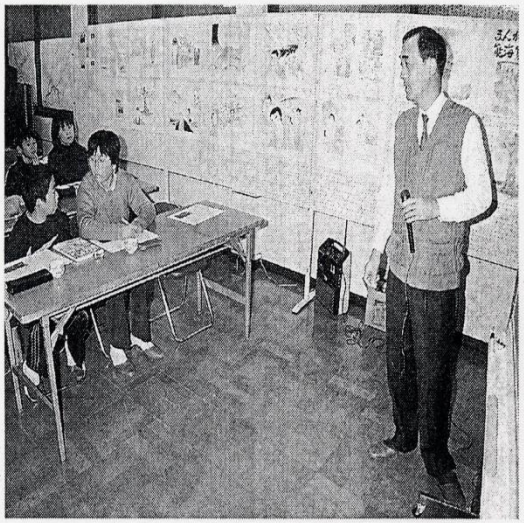
出版された「まんが　西蔵探検家　能海寛」

2002年（平成14年）11月14日（木曜日）　山陰中央新報

漫画で学ぼう「能海寛」

学習塾スタート　親子15人　知識深める

金城



漫画の朗読を通じて能海の業績を学ぶ子どもたち

金城町出身のチベット探検家・能海寛（一八六八―没年不詳）の業績を漫画で学ぶ親子学習塾がこのほど、同町波佐のときわ会館であった。地元の小学生や親たち十五人が漫画を朗読しながら能海の一生をたどった。

能海の伝記漫画を出版した波佐文化協会や能海寛研究会などが主催。初回は、能海が生まれてからチベット探検へ旅立つまでの青春時代について知識を深めた。

漫画朗読では、波佐小学校六年の岡田翔治君（一二）が能海役を務め、世界の宗教を知るために英語学習に取り組む様子を熱演。他の参加者も脇役を演じ、内容を理解した。

波佐文化協会の隅田正三会長は、寺院に生まれた能海が十一歳の時に檀家（だんか）からの支援金を克明に出納帳に記したことを挙げ「能海のような明治の若者は現代に比べて精神年齢が高く、内容の濃い人生を送った」と語り掛けた。

親子塾は三回シリーズで、次回は一月十一日に同所であり、チベットを目指して中国各地を探検した軌跡を追う。

石峰＆抱月のふるさと金城町

「地域まるごと博物館」

http://www.hazaway.com

波佐文化協会　2015．12．20作製